

させぼ温州(させぼうんしゅう)

育成者：尾崎次夫(長崎県佐世保市重尾町)

来歴：「宮川早生」の枝変わり
育成地：長崎県佐世保市重尾町

来歴

昭和50年、長崎県佐世保市重尾町 尾崎次夫園の「宮川早生」15年生樹に、糖度が高く、着色が優れ、浮き皮の発生が少ない果実が着果する枝を発見。「宮川早生」に比べ品質が優れていたため、平成5年に長崎県果樹試験場で無毒化し、現在、ウイルス無毒化苗を用いて佐世保地域に産地化を進め、平成10年からは、県内のみかん産地へ苗木が分譲されている。

特性

■栽培特性

樹勢はやや強で、樹姿は中からやや直立である。新梢の発生は多く、芽が密に発生し節間は短くわい性傾向が見られる。葉色は著しく濃く、葉肉が厚く小葉になりやすい。枝の伸長は結実するまでは旺盛であるが、着果し始めると伸長が抑えられる。着花性は良いが新梢発生量が多いことと不完全花も発生しやすいため生理落果は多い。

■果実特性

果実の大きさは中、果形は扁平で果形指数は140程度である。果皮の紅が濃く、果面は平滑でつやがある。油胞の大きさおよび密度はいずれも中である。

着色は「宮川早生」と同じく9月中旬から始まり11月中・下旬に完全着色する。果皮は薄く浮き皮になりにくい。果肉は橙色でじょうのう膜は柔らかい。

同じ栽培条件下で「宮川早生」と比較すると、糖含量が1～2度高く品質が優れている。

収穫時期が11月下旬から12月上旬となる完熟タイプのみかんである。クエン酸含量が1.0%くらいになった頃から減酸速度が鈍り、貯蔵中の味の変化が少ないため1月出荷も可能である。

■病虫害抵抗性および栽培上の留意点

そうか病、かいよう病には抵抗性であるが、一般の早生品種に比べ発芽時期がやや早いいため防除時期に注意する必要がある。初期結実性がやや劣るため、初結果の幼木や樹勢の旺盛な若木では大玉になりやすく、じょうのう膜が厚くなりやすいので、着果が少ない樹ではマルチ被覆などストレスをかける必要がある。完熟の高糖度果実を生産する場合はマルチを被覆し、夏期の灌水はストレスの程度に応じて調節し、着果は群状結実をさせM・S中心の小玉作りに努めることが肝要。マルチ被覆による増糖効果は高い。また、品種特性である果皮の紅の着色向上には反射マルチの効果が高い。

■地域適応性

温暖多湿な西南暖地では栽培上問題ない。黒ボク土など肥沃な土壤で栽培すると樹勢が強くなり結実しにくくなる。比較的耕土の浅い土壤や大苗移植による高畝栽培で根域制限を行ったほうが高品質果を生産しやすく、また排水の良い圃地条件が好ましい。

(させぼ農業協同組合)